P-3

伊平屋方言の動詞・形容詞のアクセントについての考察

カルリノ・サルバトーレ(一橋大学大学院 / 国立国語研究所)

１．はじめに

本稿は、北琉球沖縄語伊平屋方言の動詞・形容詞のアクセント体系を、型の対立に焦点を置いて、記述することを目的とする。

1.1 [1]地理・系統

伊平屋方言は伊平屋村で話されている言語である。伊平屋村は伊平屋島と野甫島からなる。これらの島々は沖縄本島北部の北に位置している。伊平屋村には、北から田名、前泊、我喜屋、島尻、野甫という 5 つの集落がある。系統的に伊平屋方言は（北）琉球諸語・沖縄語の地域変種と位置付けられる。伊平屋方言話者は 60 代以上であり、消滅の危機に瀕している言語である。

1.2 生業・文化

伊平屋村の主な産業は水産業と農業である。砂糖黍の栽培が盛んであり、モズクの生産も有名である。近年は観光業に力を入れている。伊平屋は首里から地理的に離れているとはいえ、王府と強い関係をもっていた。

1.3 伊平屋方言のアクセントの概略

伊平屋方言のアクセントの先行研究に関しては、Carlino (2018a, 2018b)が名詞のアクセン

[1] 地図は Kenmap を使用して作成した。

ト体系を明らかにしている。それによると、伊平屋方言の名詞アクセント体系は 3 つの型を持っており、ピッチの上がり目がどこにあるのかが弁別的である。形容詞のアクセントについては平山（1967）による伊平屋我喜屋方言の記述がある。これによると、以下の例のように、形容詞には 2 つの型が区別されるという（平山 1967: 182）。表記は原文そのままである。

ʔasasaɴ (浅い), ʔatʃisaɴ (厚い)　… <1 類の大部分>

hirusaɴ-（広い）, ʔatʃisaɴ-（熱い）…　<2 類の大部分>

しかしながら、これ以上のデータがなくアクセント体系の詳細は不明である。また、平山（1967）の記述には伊平屋方言と伊是名方言を区別していないという問題もある。動詞のアクセントについての先行研究は見当たらない。

2. 方法

調査は 2018 年 3 月に行われた。伊平屋島尻出身の 1958 年生まれの男性話者に共通語の動詞・形容詞の基本形と活用形を方言に翻訳してもらったのちに、発話してもらった。発話された音声は、音響分析ソフトウェア Praat（Boersma and Weenink 2018）を用いて分析した。調査語彙に関しては松森（2012）に含まれる候補語のリストを使用した（形容詞 58 語彙、動詞 120 語彙）。基本形と活用形を調査したが、本稿では基本形と連体形のみを分析対象とする。

３．結果

3.1　動詞のアクセント

伊平屋方言の動詞の内部構造は非常に複雑である。以下に基本的な構造を示す。伊平屋方言の動詞は必ず動詞語根があり、複数の接辞がつく。

行く	itɕ-	-u	-ɴ
	行く	非過去	直接法

伊平屋方言の動詞には 2 つの型（a 型、b 型）がある。a 型は高くはじまる（図 1)。そののちに下降する傾向があるが下降は必須ではない。b 型は接辞で上昇が生じる。具体的にいうと、基本形では語尾接辞 ɴ に上昇が見られる（図 2)。

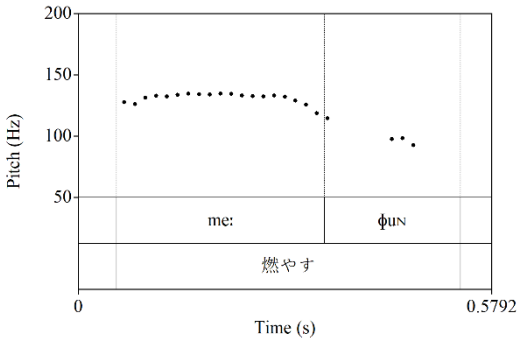

図 1　a 型　[me:ɸuɴ　「燃やす」

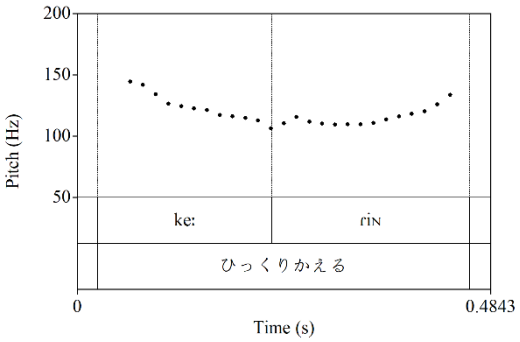

図 2　b 型 ke:ɾi[ɴ　「ひっくりかえる」

連体形では a 型と b 型の差はより明らかになる（図 3-4)。b 型では上昇は連体形を表す語尾接辞-nu で見られる。

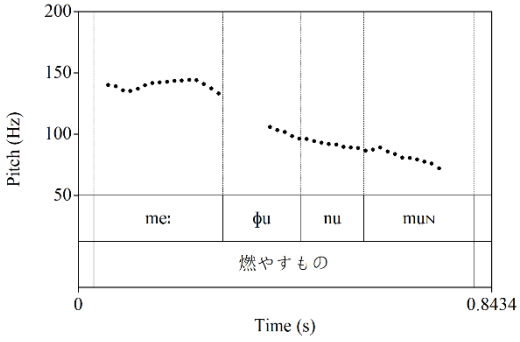

図 3　a 型　[me:ɸunumuɴ　「燃やすもの」

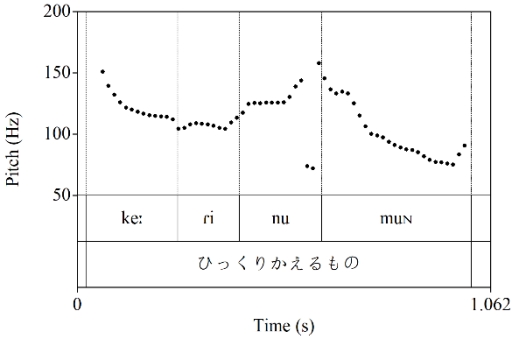

図 4　b 型 ke:ɾi[numuɴ　「ひっくりかえるもの」

3.2 形容詞のアクセント

伊平屋方言の形容詞は語幹（語根+接辞）と語尾接辞からなる。まず語根があり、それに形容詞接辞-sa あるいは-ha がつく。これらは語幹を成す。語幹には、コピュラ aɴ がと語幹が融合した形式-ɴ が語尾接辞として付く。

高い	taka-	-ha	-N
軽い	gas-	-sa	-N
	語根	形容詞接辞	語尾接辞
	語幹		

伊平屋方言の形容詞には、動詞と同様に、2 つの型（a 型、b 型）がある。a 型の形容詞は b 型の形容詞と比較して少ない。（これは元来の a 型が b 型に合流する過程にあるためだと思われる。）以下、それぞれの型の特徴を f0 曲線を見ながら分析し、型の対立を明らかにする。

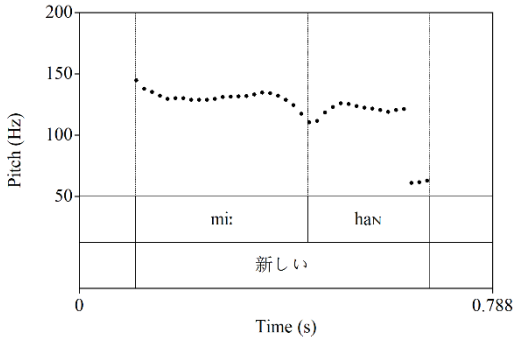

図 4　a 型　[mi:haN 「新しい」

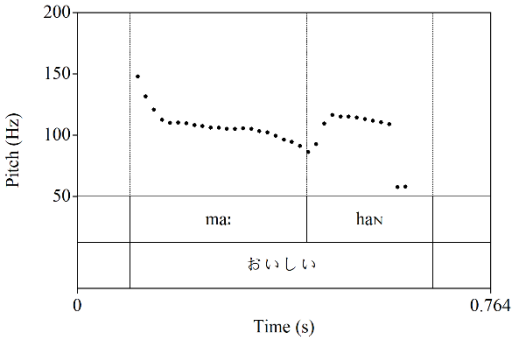

図 5　b 型 ma:[haN 「おいしい」

まず a 型の形容詞は最初から高く、平板な音調を取る（図 4）。一方、b 型の形容詞は語幹末（つまり-ha/sa から）から上昇が見られる（図 5）。形容詞の連体形では a 型と b 型の差がより明らかになる。

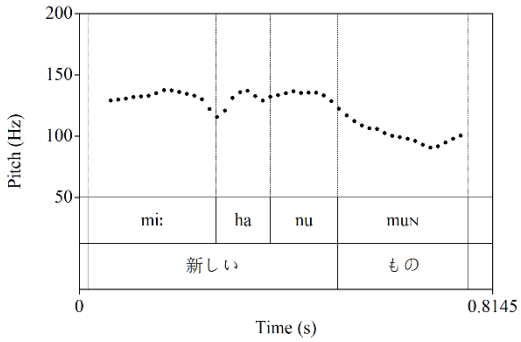

図 6　a 型　[mi:hanumuN 「新しいもの」

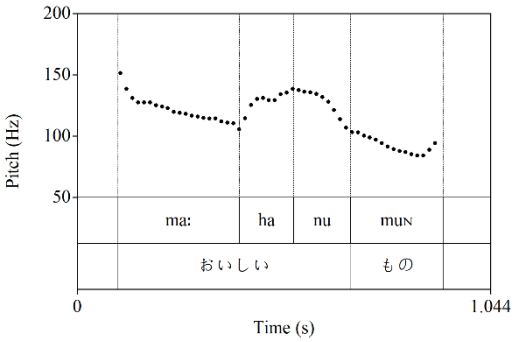

図 7　b 型 ma:[hanumuN 「おいしいもの」

連体形でも a 型では頭から高い音調がみられる（図 6）。b 型では語幹末から上昇する（図 7）。

4. まとめと今後の課題

本稿では伊平屋方言の動詞・形容詞のアクセントについて考察した。先行研究では形容詞にアクセント型の対立があることは指摘されていたが、本稿では音響分析によってその対立を確認し、より詳細な記述を進めた。分析の結果、a 型は語頭から高い平板音調を持ち、b 型は形容詞語幹末から上昇する音調を持つことがわかった。一方動詞のアクセントはこれまで記述されてこなかった。本研究は、a 型は頭から高く、そののち下降する傾向がある音調を持ち、b 型は語尾接辞で上昇する音調を持つことを明らかにした。北琉球諸語の動詞・形容詞形態論は複雑であり、それぞれの活用形におけるアクセントの実現や、接辞の種類や数がアクセントの実現にどのような効果を与えるかを明らかにするなど課題はまだ多く残っている。これらは今後の課題とする。

謝辞

調査に協力してくださった方々、伊平屋村教育委員会の皆さまに御礼を申し上げる。

本研究は科研費基盤研究（B）「比較言語学的方法による日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」（研究代表者　五十嵐陽介）の助成を受けたものである。

参考文献

CARLINO Salvatore (2018a)『伊平屋方言のアクセントについて』「国際沖縄研究所共同研究：島嶼間の言語接触の実態解明に向けての基 礎的研究」成果報告及び関連研究発表会 2018 年 2 月 21 日.

CARLINO Salvatore (2018b) “The three-patterns accent of the dialect of Iheya, Okinawa”. Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization. August 5, National Institute of Japanese Language and Linguistics. 5, August 2018.

松森晶子(2012)「琉球語調査用『系列別語彙』の素案」『音声研究』16(1): 30-40.

平山 輝男 , 大島 一郎 , 中本 正智 (1967)『 琉球方言の総合的研究』明治書院.

インターネット資料

Boersma, Paul & Weenink, David (2018). Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.0.43, retrieved 8 September 2018 from http://www.praat.org/

Kenmap
http://www5b.biglobe.ne.jp/~t-kamada/